

何かを一緒に考えていけばいいわけですね。戦術を変えればいいわけですね。

**中村** それから、報告を全部やめて、あらかじめパネリストに「この問題について討議するのだけれど、あなたはどう思いますか」といった質問をしておく形式の方が、進行としては良かったかなという気がします。

**谷** そうですね。例えば「あなたの国でのモダニズムという言葉の規定性は何か、というようなテーマを必ず出しますので、それについて考えてください」とパネリストに言う。レジュメは用意してもらいけれど、それを読むのではないという形まで絞り込めれば、随分違ったかなという感じはします。

**中村** ディスカッションというか対話、議論にならなかった部分は、ちょっと欲求不満を残しましたね。一般論ではなくて、むしろ、ひとりの作家についてどう考えるかという論議をするなどといったほうが生産的だったかもしれません。

**谷** そうかもしれませんね。思い切って、逆にスライドレクチャーに時間をかけてしまうとか。

**中村** 例えば、蔡さんのスライドを上映して、その後、それをどう見たかという議論があるとか。

**清水** 具体的な話を中心にしていかないと、いつまでたってもかみ合わないかもしれない。今回は勉強の時間が必要だろうということでスライドを紹介したわけですが、スライドを見ても実際の作品はよく分からないんです。そこがづらいところです。特に第I、第IIセッションでは、随分スライドで歴史とかを勉強したけれど、結局、現物を見ないと分からない。それなら、みんながある程度共通認識を持てるものを中心に話していったほうが、違いなどが分かったかもしれないですね。

**中村** 確かに、具体的なテーマに絞った方が前に進みやすいし、話がかみ合いやすいですね。前の話と重なりますが、宗教の多様性も背景にあるし、それらを抜きにして一般論を話し合ってもうまく行かないでしょう。

それと、また技術論になりますが、発言する時に母国語かどうかという問題もあると思います。

**清水** そういう問題も、今後ありますよね。それぞれ母国語の通訳を介せば、もっと自由な発言ができたかもしれない。

**谷** そうですね、発言する言語によって確かにハンディはありますよね。

**中村** もうひとつ感じたことは、聴衆の側についてです。教科書的な知識の羅列を予想することなく、たまたま今回のシンポジウムを聴きに来た人もいるわけですね。そういうことに関心を持って参加した人もいますが、一般的な講義風のしゃべりにはあまり興味を感じないという側の人もいます。

**谷** 率直な感想で言いますと、聴衆の8割ぐらいがそういう人だったのではないかと思います。比較的若い層が多かったでしょう。僕は、もっと新しい話をして欲しいんだ、というような感じに受け止められたんですけどね。そうでもなかったですか。

**清水** そういう意見がありましたね。お勉強の部分が無くても良かった、もっと現在のことについて議論したほうが話が進んだのではないか、ということを行っている人もいました。全員がそう思っているかどうか分からないけれども。

**ACC** 聴衆の層が、若い学生のような人から美術を専門にしている人まで、いろいろだったと思うんです。そういった人々が同居してしまっただけで、歴史の部分をよく知っていて今回来た人にとっては、長い歴史の話はつまらないし、知らないで初めて来た人にとっては、レクチャーも勉強になったということがありますよね。そのへんも、聴く側と対話する側の間に距離が出てくることになるんじゃないでしょうか。

**中村** そうですね。今日は良いお勉強になった、良い話を聞いたと言っている人もいましたし、スライドをもっとたくさん見せてくれば、そのほうが良かったという人も一方にいるのは事実です。

**ACC** 多分ビギナーのほうは、もっとそう思っている。しかし、そうではないものを期待していた人たちにとっては、消化不良かもしれません。

**清水** ビギナーじゃない人たちだって、知識は少ないと思いますけどね。

**中村** それで、第Iセッションとテキストによって、最低限の共通の知識を持つということだったわけですが。

**谷** 建畠さんの言葉を借りれば、全体は初日にやったような組み方で網羅してしまって、翌日の第IIセッションみたいなものは、分科会にしてしまうという案がありました。それで、出入り自由にしてしまう。確かに、1回で網羅するのは、かなりしんどいことですね。

**ACC** そうですね。1回ですべて満足してもらおうというのは難しいことだと思います。

■

**ACC** 最後に、オーガナイザーとしてのアセアン文化センターに期待することや態度、期待する企画など、今後への希望があればお伺いしたいのですが。例えば、今回のような対話は、もっといろいろな形を変えて続けていくべきであるという意見はありますでしょうか。

**清水** 僕が唯一お願いしたいことは、続けて欲しいということです。継続していけば、交流も深まっていくでしょう。とにかく、もっと生身の声で話し合う機会が必要だと思います。

**中村** 先ほどの繰り返しになりますが、テーマを整理して、もう少し具体的なテーマでシンポジウムを開催すること。それからアジアの問題を取り上げるにしても、アジアではない地域からの人の参加もあったほうが良いということ。事前に、ある程度日本語圏で内容を整理するというか、多くの人にいろいろな意見を出してもらう機会があっても良いということですね。

もうひとつは、我々にとっての反省でもあるのだけれど、アジアという概念、モダニズムという概念を始めとして、言葉の曖昧な使い方をなるべく避けて、とくにそれが政治的な意味合いを持ったりする場合には、慎重に考えて事柄に対応するのが望ましいということです。

それから、討論したものが何かの形で後で印刷物になって、ジャーナリズムにもう少し広がるようになれば良いと思いますね。いまお互いにどういう問題を解決しなければならないのか、という観点に立った問題設定の仕方が必要で、討論を通じて見えてきたことが記事などになれば、それは社会性を持つはずで。

**谷** 清水さんが言われたようなことや中村さんの言われたことは勿論です。細かいやり方はいろいろあるでしょうが、継続していかざるを得ないでしょう。また今回のパネリストを見ても、日本にもものすごく期待しているという感じは否めないわけですね。そういう背景があるならば、どんどんそういう機会をつくっていくべきでしょう。今回は不発に終わった部分も多いけれども、こういうシンポジウムも必要だという感じはします。

それから、我々でつくってきた形でのシンポジウム自体が、今回吹き出してきた問題を含めて、ひとつの限界みたいなものもあったのではないかという感じがしますので、このシンポジウムに非常に関心を持って来てくれたいろいろな方々から、先ほどの言語規定の問題とか歴史的なことについての考えを拝聴しながら、我々も考えていかなければいけないと思います。

この3年の間に、まぎれもなくアジアのバイは広がった感じはします。アセアン文化センターの事業についての聴衆の関心など一切合財を含めて、バイは広がっていますが、その反面、今回のシンポジウムを通じて難しい問題も出てきているので、展覧会形式を平行して開催していくこともあるでしょうし、シンポジウムとして企画する場合もあるでしょう。いずれにしても、アジアのことを取り上げて、逆に日本の現実を突かれるという視線が送られてきたわけだけれど、それも非常に良いかなと思います。それが大きな成果ではなかったでしょうか。

**清水** これはできるかどうか分かりませんが、開催する国、場所を変えてみるというのも、新しい視点が出てくるかもしれないですね。

**中村** 違う国に行って、という意味ですか。

**清水** ええ、違う国です。例えば、オーガナイザーは別の国にやってもらおう。すると、全然違う視点が出てくるかもしれない。そういうのも面白いでしょうね。

**ACC** いろいろと貴重なご意見をいただき、ありがとうございます。今後は、先ほどおっしゃったように、公開制とか非公開制とかシンポジウムの開催方法を吟味して、対象をきちっと見極めたほうが良いのではないかということが1点挙げられますでしょうか。アジアとかアジア美術に関する関心が広がっているいまの現状でしたら、じっくりと話したほうが、日本における定着度もより深まるのではないかということですね。もう1点は、具体的なテーマに絞ったほうが良いということでしょうか。今後継続してやる場合は、そういったことを考慮して開催していきたいと思います。

本日はどうもありがとうございました。

パネリストのプロフィール (役職は1994年10月現在)



**蔡國強**

(美術作家/中国)

ツァイ・グオチャン (Cai Guo Qiang) / 1957年、中国福建省泉州市生まれ。1985年上海戯劇大学美術学部卒業後、作家活動を続けている。1986年に初来日以来、日本とのつながりも深く、個展を含め多くの展覧会に出品している。最近では、パース国際芸術祭「源泉」(イギリス1994年)、「暗黒中の心」展(オランダ1994年)などへ出品。カルティエ現代美術財団美術館(パリ1995年)での個展、また、東京都現代美術館のオープニングにも出品。現在は茨城県取手市在住。

**アリス・G・ギリエルモ**

(フィリピン大学準教授/フィリピン)

Alice G. Guillermo / 1938年、マニラ(フィリピン)生まれ。ホリー・スピリット・カレッジを卒業、フィリピン大学で修士号取得後、フランス政府の奨学金を得て、エクス・マルセイユ大学で学ぶ。帰国後はフィリピンの近代美術史を専門に大学で教鞭を執るかたわら、展覧会の企画や執筆活動に力を入れる。1991年には国際交流基金のフェロシップで3か月間日本に滞在し、アセアン文化センターでフィリピン近代美術史の講演会を行ったこともある。現在フィリピン大学文芸学部美術学科準教授。ケソン・シティ在住。

**黒田雷児**

(福岡市美術館学芸員)

くろだ・らいじ / 1961年、東京都生まれ。1985年東京大学大学院修士課程美術史学専修修了。現在、福岡市美術館の学芸員。第5回バングラデシュ・アジア美術ビエンナーレ(1991年)のコミッショナー。福岡市美術館の「第3回アジア美術展」(1989年)やアジア現代作家シリーズなどの展覧会企画に携わる。「非常口 中国前衛美術家展」シンポジウム(1991年)でのパネリストや、円卓会議「現代美術：アジア」(ニューヨーク、アジア・ソサエティ1992年)出席など、アジア美術に関する発言の場も多い。専門は日本の戦後美術。

## 栗憲庭

(美術評論家/中国)

リ・シエンティン (Li Xianting) / 1950年、吉林 (中国) 生まれ。北京中央美術学院において水墨画を学び、作家としてスタートしたが、中国の新美術運動である1979年の「星畫会」以後、美術雑誌「美術」や『中国美術報』の編集に携わりながら、本格的な美術評論を開始。最近では第45回ヴェネツィア・ビエンナーレの“Passage to the Orient” (1993年) や “China's New Art, Post 1989” (香港1993年) などの企画に参画するなど、“ポスト1989世代” と呼ばれる中国国内の若い作家を海外に向けて紹介している。北京在住。

## 宮島達男

(美術作家)

みやじま・たつお / 1957年、東京都生まれ。1984年東京芸術大学美術学部油絵科卒業、1986年同大学院油絵科修士課程修了。在学中より作家活動を始め、個展・グループ展を開いていたが、1988年ヴェネツィア・ビエンナーレのアベルト部門に招待された頃から、国際的にも注目を集める。「133651」(いわき市立美術館1992年・個展)、「パフォーミング・オブジェクト」(ボストン1992年)、「都市空間への提言・非常識」(大分美術館1993年)、「戦後日本の前衛美術」(横浜美術館1994年)などに出品し、精力的な活動を続けている。

## 中村英樹

(美術評論家)

なかむら・ひでき / 1940年、名古屋生まれ。1963年、名古屋大学文学部哲学科 (美学美術史専攻) 卒業。現在、名古屋造形芸術大学教授として教鞭を執るかたわら、美術評論活動を続けている。専門は現代美術。第6回 (1986年)、第7回 (1991年) インド・トリエンナーレ、第3回バングラダシユ・アジア美術ビエンナーレ (1986年) のコミッション、第1回アジア・パシフィック現代美術トリエンナーレ (ブリスベン1993年) を始め、海外展にも多数参画。1996年にはニューヨークのアジア・ソサエティ主催の展覧会「Traditions/Tensions」展のゲスト・キュレーターを務める予定。バンコック在住。

## 大野郁彦

(外務事務官)

おおの・いくひこ / 1952年、横浜市生まれ。1979年東京造形大学卒業後、筑波大学大学院修士課程芸術研究科修了。1984年から1986年まで大韓民国国立現代美術館客員研究員として、また1987年から1991年までは外務省専門調査員としてソウルに滞在。1992年より大韓民国日本大使館の一等書記官を務め、1994年5月に帰国。現在は外務省文化第一課に在職。韓国滞在中に、国立ソウル大学博士課程 (考古美術史) を修了。著書に『現代東洋画』(韓国美術論社1991年/共著) がある。

## 尾崎真人

(板橋区立美術館学芸員)

おざき・まさと / 1952年、栃木県生まれ。1980年早稲田大学第二文学部美術史学科卒業後、同大学院芸術課程日本美術史修了。専門は日本の前衛美術。現在、板橋区立美術館学芸員として、「日本の抽象絵画1910-1945」(1992年)、「再制作と引用」(1993年)、「KARADAがARTになるとき」(1994年)などの展覧会企画に携わる。1992年-1993年には、ハイデルベルク大学客員教授として日本の前衛美術を講義。論文に『大地のヴィナスから都会のヴィナスへ ベルリン・東京、1922年』など。

## アピナン・ポーサーナン

(美術評論家/タイ)

Apinan Poshyananda / 1956年、バンコック (タイ) 生まれ。エジンバラ大学 (スコットランド) で修士号を、コーネル大学 (米国) で美術史の博士号を取得。タイ帰国後の1991年からチューラーロンコン大学で美術史の教鞭を執るかたわら、美術評論を続ける。第1回アジア・パシフィック現代美術トリエンナーレ (ブリスベン1993年) を始め、海外展にも多数参画。1996年にはニューヨークのアジア・ソサエティ主催の展覧会「Traditions/Tensions」展のゲスト・キュレーターを務める予定。バンコック在住。

## 清水敏男

(水戸芸術館現代美術センター芸術監督)

しみず・としお / 1953年、東京都生まれ。東京国立大学文学部 (仏文学専攻) 卒業後、アルジェリア滞在中を経て、バリのエコール・ド・ルーブルにて博物館学を学び、1985年同学位論文提出資格獲得 (博士相当)。1991年まで東京都庭園美術館勤務後、水戸芸術館現代美術ギャラリー美術監督 (現・現代美術センター芸術監督) に就任。「ジェニー・ホルツァー展」(1994年) など現代美術の展覧会を企画する一方で、日本の歴史と文化を踏まえた新しい博物館学 (ミュージオロジー) の実現を水戸の地で目指す。

## 塩田純一

(東京都現代美術館学芸員)

しおだ・じゅんいち / 1950年、東京都生まれ。1975年、東北大学文学部哲学科 (美学西洋美術史専攻) 卒業後、同大学院で修士号取得。専門は現代美術。栃木県立美術館、世田谷美術館学芸員として多数展覧会を企画。最近では「廃墟としてのわが家——都市と現代美術」(1992年)、「パラレル・ヴィジョン (日本のアウトサイダーアート)」(1993年)。現在、東京都現代美術館学芸員。著書に『現代芸術事典』(美術出版社1993年/共著)、『美の裏方——学芸員からのメッセージ』(ベリカ出版社1993年/共著) など。

## ジム・スパンカット

(美術評論家/インドネシア)

Jim Supangkat / 1948年、ウジュン・バンドン (インドネシア) 生まれ。バンドン工科大学美術デザイン学部において美術理論などを学んだ後、1979年ハーグ (オランダ) のサイコポリス・アート・アカデミーの修士課程修了。現在、美術評論を展開する一方、第1回アジア・パシフィック現代美術トリエンナーレ (ブリスベン1993年) など海外展の企画にも多く携わる。また、インドネシア現代美術の変革を示すとして好評を得た、1993年の第9回ジャカルタ現代美術ビエンナーレの企画にも参画。ジャカルタ在住。

## 谷新

(美術評論家)

たに・あらた / 1947年、長野県生まれ。1971年千葉大学教育学部教育養成課程卒業。翌1972年「芸術における〈制度〉の問題I」で美術出版社主催の芸術評論募集第1席入選。以後、現代美術を専門に評論活動を続ける一方、「90年代のアートシーン」展(1991年)など多数の展覧会企画にも携わる。著書に『回転する表象——現代美術/脱ポストモダンの視覚』(現代企画室1992年)、『北上する南風——東南アジアの現代美術』(現代企画室1993年) など。

## 後小路雅弘

(福岡市美術館学芸員)

うしろしょうじ・まさひろ / 1954年、北九州市生まれ。1978年、九州大学文学部哲学科 (美学美術史専攻) 卒業後、福岡市美術館の学芸員として、「アジア現代作家シリーズ」や、過去3回の「アジア美術展」および1994年9-10月開催の「第4回アジア美術展」の企画を担当。また、「美術前線北上中——東南アジアのニュー・アート」展(1992年)の企画にも参画するなど、特に東南アジアの美術事情に詳しい。論文に「フィリピン現代美術と〈物語〉」(民族藝術8号1992年) など。

## ズルキフリー・B・ユソフ

(美術作家/マレーシア)

Zulkifli B. Yusoff / 1962年、ケダ州ヤン (マレーシア) 生まれ。マラ工科大学美術デザイン学部で美術を学び、マンチェスター工芸学校美術デザイン学部 (イギリス) で美術修士号を取得。帰国後の1992年、「サロン・マレーシア」において出品作品 *Power 1* が大賞受賞。同作品は「美術前線北上中——東南アジアのニュー・アート」展(1992年)にも出品され、東京での同展オープニングを機に初来日。現在、フリーで、作家活動を続けている。クアラルンプール近郊在住。

## おわりに

本シンポジウムの2日間にわたるディスカッションにおいては、いろいろな問題・課題が出されましたが、そのなかには、「アジア」や「リアリズム」などの概念規定をめぐる問題、「近代」の意味を問い直すことなど非常に基本的な問題がありました。そして、これらの問題を突き詰めていくと、これまで何となく了解されていた概念も、改めて根本から考え直す必要性のあることが痛感されました。また、「アジアにおける多様性」は、企画段階における最も自明な前提のひとつではありましたが、現実には、予想をはるかに越え、共通項をひとつ見つけることにすら大きな困難を伴いました。「美術」という共通項で話し合えるという思いは、見事に打ち砕かれたと言って良いでしょう。

今回は、短い時間で多くを望んだ企画に起因するところもあるとは思いますが、いわゆる「提言」とか「合意」に結び付く結論は何ひとつ引き出せませんでした。アジアという限られたはずの地域の、しかも美術というジャンルに絞ったなかでさえ、容易にコミュニケーションが成り立たなかったわけです。しかしながら、このような厳しい現実によって、相互理解の必要性が再確認されたこと自体、今回の最大の収穫でした。また、国内外の美術関係者が直接話し合う機会を持てたことは、大変意義深いことだったと言えるのではないのでしょうか。本シンポジウムは、当センターの5年間の美術事業を締め括った事業でしたが、日本とアジア諸国との関係を考えるうえで今後の課題が浮かび上がってきたという意味で、これからの事業の指針ともなったと思います。

最後になりましたが、今回のシンポジウム開催にあたり、ご出席いただいたパネリストの皆さまを始め、多大なるご協力を頂きました関係者の方々に深く感謝致します。特に、お忙しいなか、企画当初から本シンポジウムのためにご尽力頂きました、中村英樹・谷新・清水敏男の3氏には改めてお礼を申し上げます。

(国際交流基金アセアン文化センター)

現代美術シンポジウム 1994  
「アジア思潮のポテンシャル」 報告書

発行=国際交流基金アセアン文化センター

発行日=1995年3月15日

編集=古市保子+小林泉

英文和訳=藤原えりみ+平山ヒサ子+小林泉

中文和訳=河野明子

デザイン=早瀬芳文

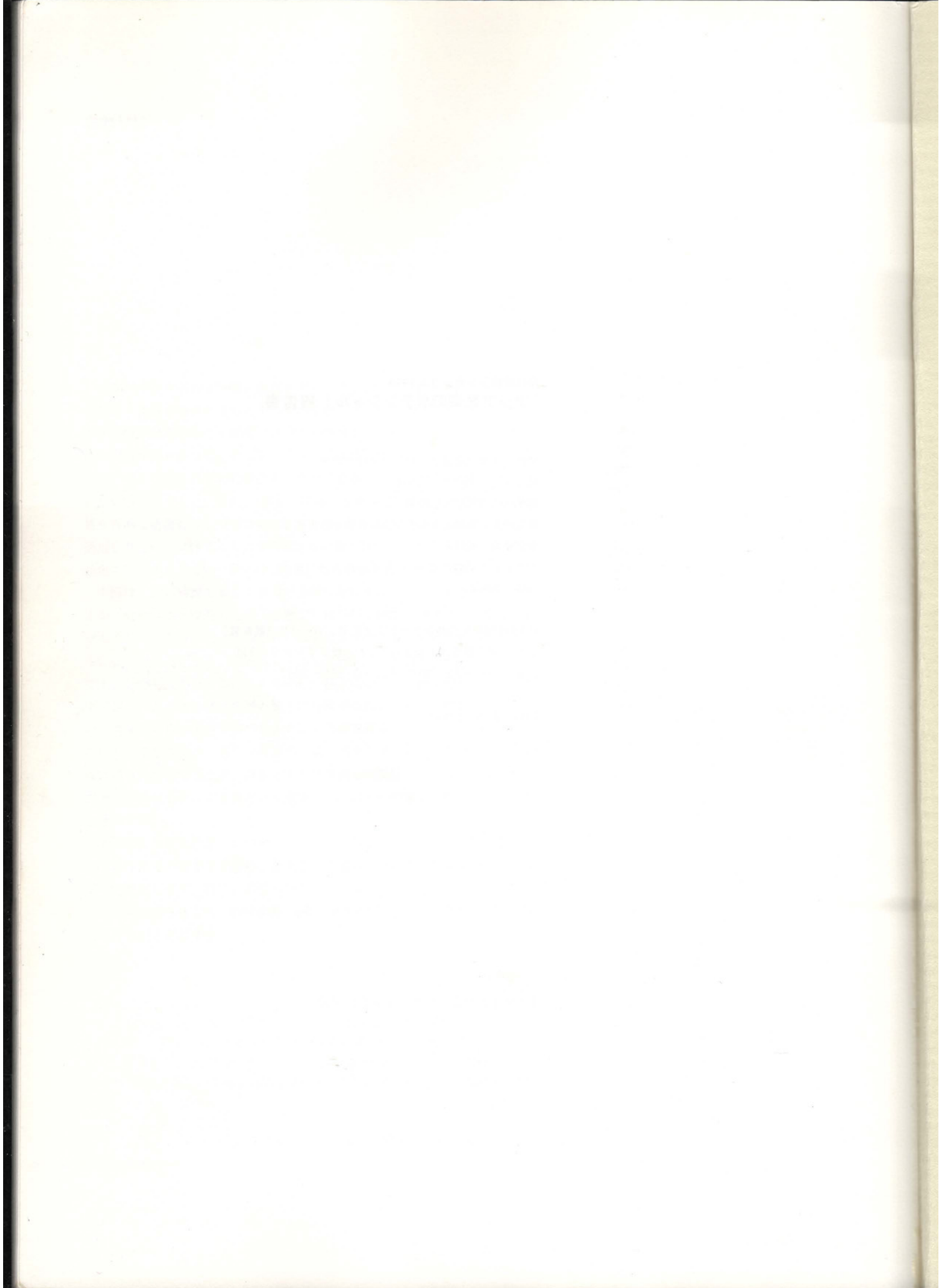
印刷=NEO2

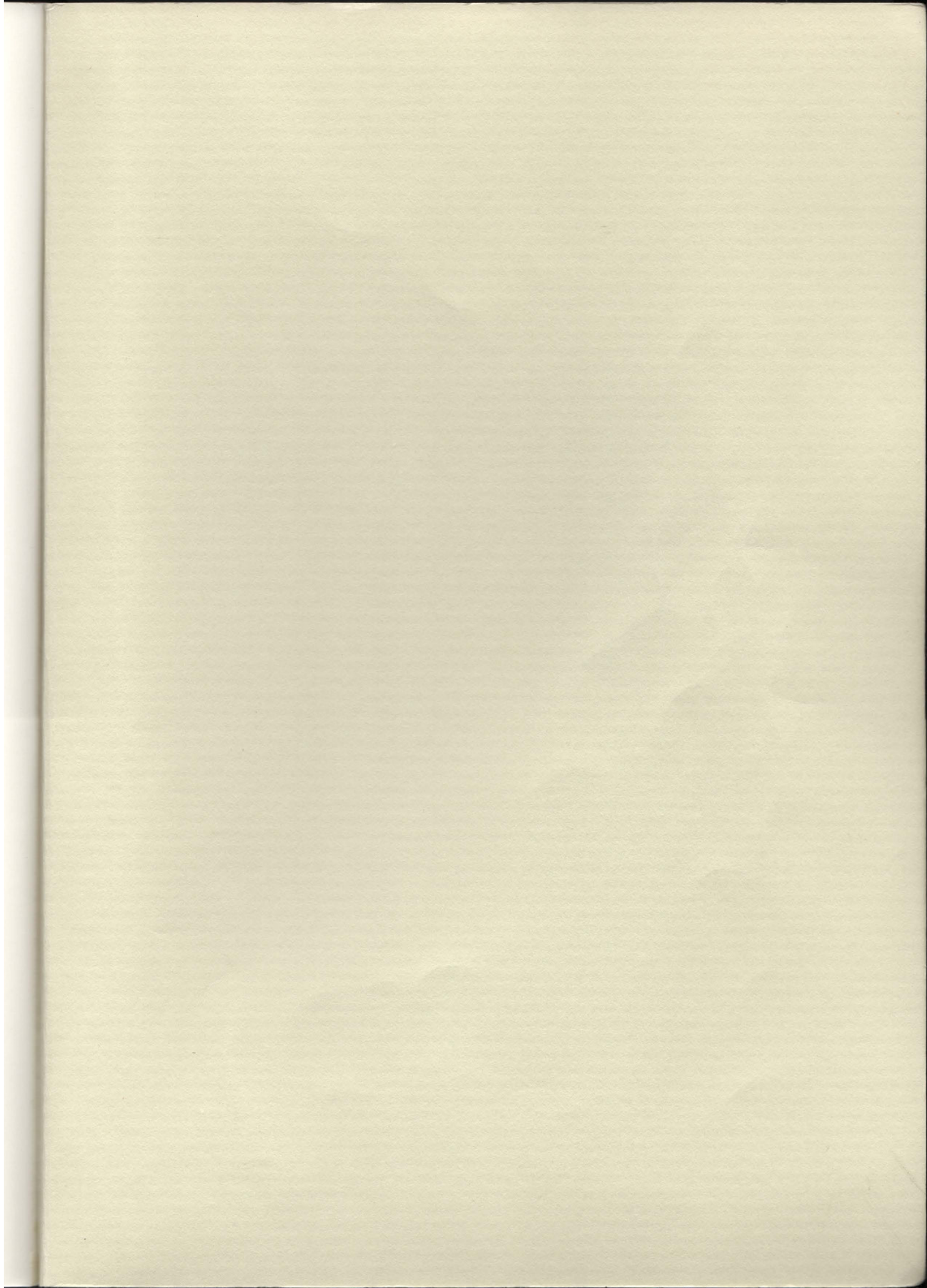
©1994 国際交流基金アセアン文化センター [禁無断転載]

〒107 東京都港区赤坂2-17-22 赤坂ツインタワー1階

Phone. 03-5562-3892 Fax. 03-5562-3897

Printed in Japan







*[The text in this block is extremely faint and illegible due to the low resolution and quality of the scan. It appears to be a dense block of text, possibly a list or a series of entries, but the individual characters and words cannot be discerned.]*